



未来を拓く  
起業家たち

## 暮らしに勇気を与えるママ起業



### そえた あさみ

福島県田村市生まれ。高校卒業後、東京のバス会社に就職しツアーガイドを務める。結婚後、郡山市に移住。2013年にカラコロを創業。2018年、一般社団法人Switchの理事に就任。

#### 〈企業概要〉

- ▶ 創業 2013年
- ▶ 従業者数 1人
- ▶ 事業内容 ベビーマッサージ教室の運営
- ▶ 所在地 福島県郡山市安積町 笹川高石坊52-3
- ▶ 電話番号 090(9811)1526
- ▶ URL <http://caracoro.sunnyday.jp>

### カラコロ 添田 麻美

「親子のカラダとココロを元気にしたくて」。添田麻美さんが店名に込めた思いだ。2013年、1歳の息子をもつ女性が福島県郡山市の自宅でベビーマッサージ教室「カラコロ」を開いた。

東日本大震災後の混乱が残るなか、起業という道を選択したママの足跡をたどった。

### 不安を解消するために

——ベビーマッサージ教室とはどのようなサービスでしょうか。

乳幼児とのスキンシップについてレクチャーしています。主にお母さんが子どもを連れてきますが、最近はお父さんが来店することもあります。

乳幼児とのコミュニケーションは簡単ではありません。言葉は通じませんし、突然泣かれたり、ごはんを食べてくれなかったり、ついにはそっぽを向かれたり。これがストレスになり、育児ノイローゼになる方もいます。

ベビーマッサージは、スキンシップ

を通じて親子のコミュニケーションが活発になることを目指しています。乳幼児の体は柔らかく肌も敏感ですから、親であっても、慣れないうちのスキンシップはぎこちないものになりがちです。そこで安心して触れ合えるように、当店のようなサービスを利用する方が増えているのです。郡山市内では、わたしが開業した2013年までは1教室だけでしたが、この5年の間に、同業者が3教室増えました。

——料金やサービスの内容について詳しく教えてください。

1回の料金は親子1組当たり1,500円です。毎回10組ほどの親子が参加

します。1回ごとに参加申し込みを受け付けていますが、月齢が上がるたびに参加して下さるリピーターが多いです。

レッスンでは、参加者同士があいさつを交わした後、ベビーヨガから始めていきます。服を着たまま手足を軽くストレッチするように伸ばしてあげたり、リズムに合わせて抱き上げたりします。

わたしは指導役で、実際に子どもに触れるのは親です。いつも一緒にいるはずなのに、初めのうちはどういうわけか、お互いに固い表情をしています。その様子がほほ笑ましいです。

緊張がほぐれ、子どもたちの体が温まってきたらオムツ一枚になって、マッサージに移ります。肌荒れを防ぐために、無添加のオイルを使っています。くすぐったそうにしている子どもたちの表情が、何とも言えません。

レッスンの終盤、にこにこ顔の子どもが裸で並ぶ姿は本当に「かわいい！」の一言に尽きます。この頃には親同士も打ち解け、レッスンが終わってもおしゃべりは続く、といったことがよくあります。

売上げのことを考えると、時間を区切ってレッスン数を増やすべきかもしれませんが、こうしたひとときが大切と考えるわたしは、前後のスケジュールに余裕をもって教室を運営しています。

——起業に至るまでの経緯を教えてください。

わたしは福島県田村市の出身で、高校卒業後、東京のバス会社に就職しました。ツアーガイドとして働いた後、結婚を機に郡山にUターンしました。ホテルでウェディングプランナーとして勤務し、出産を経て専業主婦になりました。

子どもが生まれた2012年当時は原発事故の影響で、子連れでの外出を控える親が多くいました。わたしもその一人でした。

子どもと二人きりで家にいると孤独な気持ちになり、不安ばかりが募ってきます。どうにかして気分転換できないかと思っていたところ、ベビーマッサージのイベントがあることを知り、参加してみたのです。

インストラクターに教わったとおりにしてわが子に触れると、今までに見たことのない、とびきりの笑顔を返してくれました。あの表情は今でも鮮明に覚えています。

たまたま一緒になったお母さんとの会話も印象に残っています。自分と同じように不安を感じながら子育てをしていることがわかり、元気が湧いてきたものです。

わたしもベビーマッサージ教室を開けたらいいな。家に帰るときにはすっかり前向きな気持ちになっていました。これが起業のきっかけです。

## 元気は勇気になる

——子育てしながら起業の準備をするのは大変だったと思います。

周囲のサポートなしには起業できませんでした。まず、参加した教室のインストラクター。起業の相談をすると、民間機関が発行する認証の取得を勧めてくれました。事業計画づくりでも助けてもらいました。

市内の企業に勤める夫や、夫の両親は子どもの面倒を見てくれました。おかげで通信教育に取り組んだり、実技講習を受けたりする時間を確保できました。

この協力を報いたいと自分を奮い立たせ、2013年に認証を取得しました。そして起業のことを打ち明けると、「やってみたらいい」。家族全員が背中を押してくれて、ほっとしました。

こうして起業したわけですが、大々的にやるつもりはなかったのに、自宅の一室でスタートしました。やがてお母さんたちの間で口コミが広がると、利用者が増えていき、自宅では手狭になってしまいました。このときも周りの方々が助けてくれました。

——どのようなサポートですか。

出張教室を開くための場所を貸してもらえないかと、公民館や近くの飲食店にお願いして回ったのです。ある



レッスンの様子

カフェのマスターは、店がにぎわうのはありがたいと言って、快く引き受けてくれたばかりか、レッスンと食事をセットにしたプランを提案してくれました。食事の支度は親なら誰もが直面する悩みの一つ。これが大好評で、今も定期的に開催しています。

ただ、カフェにはほかのお客さまも来ますから、いつも甘えるわけにはいきません。そこで近所の住宅メーカーにも場所の提供をお願いしました。モデルルームを借りられれば、自宅のようになりラックスした雰囲気です。無理を承知で社長にお願いしたところ、なんとその場で認めてくれました。当店の利用者は子育てファミリーですから、住宅メーカー側からすれば、将来有望なお客さまである、とのことでした。

さらに2014年には、社長の厚意で、会社の敷地内にある資材倉庫を改装し、安く貸し出してくれることになりました。三角屋根が目をはく、7坪ほどのかわいらしい店が完成したとき

は、誰よりもわたしがびっくりしてしまいました。

こうしてお店をもてた結果、起業から5年間で延べ3,000組の親子にご利用いただくことができました。たいへんありがたいことに、「麻美先生に会いたくて」と言って来る方や、第2子、第3子の誕生を知らせに来てくれる方もいます。

正直なところ、こんなに多くの人がカラコロを利用してくれるとは思っていませんでした。郡山で暮らす親子、そして周囲のサポートのおかげで天職に巡り合い、自分らしさを取り戻せました。

——自分らしさとは何でしょうか。

夫によく言われるのですが、わたしは世話好きな性格のようです。振り返ってみると確かに、東京ではバスツアーのガイドとして、郡山では出産するまでウエディングプランナーとして働いてきました。どちらも誰かの喜びや幸せをお手伝いする仕事です。結婚や出産といったライフイベントがなかったら、いつまでも続けたい。胸を張ってそう言えるほど、充実した毎日でした。

だからこそ、震災後に感じた不安は人一倍大きく、その反動から、子育てをしながらでも働ける起業を決意したのだと思います。

レッスンに来るお母さんたちは、

これからの生活やキャリアがよく話題に上ります。事情は皆それぞれあり、お互いに耳を傾けます。わたしも起業した母として、これまでの経験を話しています。

当店の利用者には、出産を機に一度は仕事を諦めたけれど、復職した人がたくさんいます。母親同士の会話が励みになったようです。なかには起業した人もいます。

実は今、カラコロは二毛作店舗です。わたしが不在のときは妊婦向けのマッサージ店に変わります。起業したいというカラコロ卒業生から相談を受け、お店を共同で使えるよう貸主をお願いして、現在の形が実現したのです。

お店をシェアすることになるので営業日数は減りますが、最近はベビーマッサージ教室以外の新しい仕事が増え、店を空けることも多くなってきたので、結果的に助かっています。

思いは姿と形を変えながら

——新しい仕事とはどのようなものですか。

二つあります。一つは講演活動です。これまでの取り組みを地元の新聞や市の広報誌で紹介していただいた結果、官民を問わずさまざまな方から郡山での子育て、起業などに関する経験を話してほしいと頼まれるようになったのです。先日は、福島県が東京で

開催したU・Iターンの推進イベントでお話してきました。

正直な話、講演料はわずかですが、わたしにしかできないことだと考え、積極的に引き受けています。震災復興が進んだこともあってか、最近、転勤などで郡山に来る家族が増えてきました。定住するとは限らないですけど、せつかくですから、郡山での子育て生活を楽しんでもらいたいし、少しでもそのお手伝いができればと考えています。

—もう一つの仕事は何ですか。

わたしの故郷、田村市での仕事です。2018年3月、田村市が(株)ジェイアール東日本企画など民間企業と連携して「田村市ふるさとテレワーク推進コンソーシアム」を設立し、廃校となった小学校の跡地にテレワークセンター「テラス石森」を開設しました。この運営を担う一般社団法人Switchの理事に就任したのです。どうしてわたしに声がかかったのか不思議でしたが、福島で働く女性のロールモデルとして、センターを盛り上げてほしいとのことでした。

とはいえ、立ち上がったばかりで具体的なプランは白紙状態でした。そこで、わたしなりに考えた企画を実行しています。

一例が、田村市内に住む女性やママたちが集い、ワークショップや座談会

などを通じて交流を深めるとともに、そのなかからさまざまな声を吸い上げるというものです。

なかでも働くことに対する悩みの声は多く、今後、女性やママ向けの求人情報を紹介するとともに、市内に住む女性がいきいきと働ける場を見つけたり、ネットワークを広げたりするサポートをしていけたらいいと考えています。

—これからも仕事の幅が広がっていきそうですね。

以前より温めている企画があります。福島県に住む親子や移り住んできた親子を連れて、県内の観光名所や、地元の女性が震災後に開いたお店を回るものです。今、自治体や企業も協力したいと手を挙げてくれています。ツアーガイドはわたしが務めます。



資材倉庫を改装した店舗

起業から5年、売り上げの規模は小さいですが、おかげさまで仕事に恵まれ、たくさんの人に出会うことができました。家計を支えてくれる夫、子どもを見てくれる家族に感謝しています。あ那时的わたしがそうであったように、ベビーマッサージ教室や、教室外でのわたしの活動をきっかけに、何かに挑戦したいと考え、実現に向けて一歩を踏み出す人が一人でも増えたら、とっても嬉しいです。

## 聞き手から

自宅で始めた小さな起業は、同じ境遇にあった母親や地元企業の共感を集めながら拡大している。「生活は夫の収入頼みです」と、麻美さんは控えめだが、社会的なインパクトは小さくない。近所の親子や福島で働く人たちのカラダに元気、そして勇気を与えているからだ。

そのパワーは県外にも広がっている。2016年5月には、郡山市内の親子100組を集め「100人ベビマ」というベビーマッサージのチャリティーイベントを開催、売り上げ全額を熊本地震の被災地に寄付したそうだ。起業家が生み出すパワーには目を見張る。

麻美さんの勇気が新たな挑戦を呼び起こし、明るい未来を切り拓いていくことを期待したい。

(藤田 一郎)